

の愛着が不安定になる可能性を高めた。質の低い保育を週に10時間以上受けた場合、あるいは生後15カ月間に2カ所以上の保育環境におかれた場合は、母親がやや思いやりに欠ける場合に限るものの、母親への愛着が不安定になる可能性が高い。たとえば、子どもを読み取る力が強く細やかな子育てという点で、母親と保育者の両方が調査対象人口の下位25%に入る場合、子どもが母親に安定した愛着を持つ可能性は、ほんの45%だった。対照的に、より思いやりの深い母親と保育者の場合は、62%が安定した愛着を持っていた。

7. 保育と母子間の相互作用の質

子どもの母親への愛着の分析に加えて、保育と母子間の相互作用、または母子間の交流との関係についても研究した。研究対象となった母親の行動は、子どもを読み取る細やかさ、積極的な関与と否定的態度である。子どもの行動は、その関与を評価するために観察された。研究者は保育の質、量、家族の特徴(母親の学歴と所得)を分析し、子どもが6カ月、15カ月、24カ月、36カ月時点での母子間の相互作用との関係を調べた。

母子間の相互作用は、遊びの時間や家庭で母子が一緒にいるところをビデオに撮影し、母親の子どもに対する態度を観察した。具体的には、複数の相対する作業に直面した時に(例:子どもを見守りながら、インタビュアーと話をする)、母親がどれだけ注意深く、敏感で、積極的な愛情を見せ、あるいは抑制的な態度を見せるか観察した。

研究者は保育の質・量と母子間の相互作

用の質とに、わずかではあるものの統計的に重要な関係があることを発見した。保育の量が増えるにつれて、母子間の相互作用の細やかさや親密さが薄れるという関連性が、ささやかながら現われた。生後3年間を通じて母親以外のケアを受ける時間が長いほど、子どもに対する母親の積極的な行動がいくらか減少した。保育を受ける時間が長かった乳幼児は、母親との関与がやや薄かった。

これまでの調査で明らかになった保育の量と母子相互作用との間に、このような関連性が発見されたことで、研究チームは乳幼児期の保育の量が、その後の母子相互作用の質に関係するだろうかという疑問へと導かれていった。

研究者は、36カ月の時点で、生後6カ月の保育時間が長いほど、母親の子どもを読み取る細やかさが減少し、子どもへの積極的な関与が低いことを発見した。しかし、子どもの保育経験より所得や母親の学歴、両親が揃っていること、母親の離別の不安、母親の気分的な落ち込みなどの家族と家庭の特徴の方が、母子相互作用の質に深く関係していた。

質の高い保育(保育者と子どもの積極的な相互作用)は、母親による関与と子どもの心を読み取る細やかさの増加(生後15カ月と36カ月の時点)、子どもと母親の積極的な関与(生後36カ月の時点)の増加とささやかながら関係があった。質の高いフルタイムの保育を利用している低所得の母親は、保育を利用していない低所得の母親あるいは質の低いフルタイムの保育を利用している低所得の母親に比べて、6カ月の時点で、積極的な関与の度合いが高かった。

8. 保育と素直さ、自制、問題行動

保育の特徴(質、量、保育開始年齢、種類、安定性)と家族の特徴を検証し、それがどのように子どもの素直さ、自制、問題行動と関係しているかを調べた。その結果、子どもの保育経験よりも家族の特徴(とくに母親の子どもの心を読み取る細やかさ)の方が、子どもの行動に強い関係があることがわかった。

研究者は、保育の特徴は子どもの素直さ、自制、問題行動と、ささやかな関係がある程度だと判断した。このなかで、保育の質は、子どもの行動と最も一貫した関連性を持っていた。より細やかで繊細な配慮が受けられる保育に預けられている子どもは、2～3歳時点で、保育者が報告した問題行動の数が少なかった。

生後2年間に保育に預けられる時間が長いと、2歳の時点で保育者が報告する問題行動は多かったが、こうした影響は3歳までには消滅していた。3人以上の子どもとグループで時間を過ごすことのできた子どもは、行動に関する問題(保育者による報告)がより少なく、保育におけるより強い協調性が見られた。

9. 生後3年間の保育と子どもの認知・言語発達

本研究のもう一つのおもな目標は、保育の特徴(質、保育時間、種類、安定性)が、子どもの認知・言語発達や就学レディネスに関係するかどうか判断することであった。子どもの認知発達と就学レディネスは、標準テストを利用して測定した。言語発達は、標準テストと母親からの報告書を用いて評価した。質の高い保育は、積極的な保育の提供と言語的な刺

激と定義された。つまり、保育者がどれだけ頻繁に子どもに話しかけたり、質問をしたり、子どもの問いに答えたりしたか、である。

生後3年間の保育の質は、子どもの認知・言語発達に、わずかながら一貫した関係を持っている。保育の質が高い(積極的な言語的刺激と子どもと保育者との相互作用が多い)ほど、15カ月、24カ月、36カ月時点での子どもの言語能力、2歳時点での認知発達が優れており、3歳時点での就学レディネスも高いことが示された。

しかし、ここでも、家計や母親の語彙、家庭環境、母親による認知的な刺激などの要素を合せると、これの方が、15カ月、24カ月、36カ月時点での認知発達、および36カ月時点での言語発達と強い関係があった。

認知発達に関しては、母親による長時間の育児は子どもにとってなんらプラスにならないことがわかった。長時間、母親が世話をしている子どもの認知・言語測定での点数は、保育されている子どもと同じぐらいの事例が多かった。実際、長時間母親が世話をしている子どもと、保育を受けている子どもとを比べた時に、認知・言語結果において現われた数少ない差異は、長時間の母親による育児に比べて質の高い保育は有利で、質の低い保育は不利だということであった。保育者と子どもの相互作用の質を考慮した場合、週10時間以上保育されている子どものなかでは、保育所に預けられている子ども、そして、やや少ない度合いではあるが、家庭保育を受けている子どもは、それ以外の保育を受けている子どもに比べて認知・言語測定での成績がよかった。保育経験と子どもの認知・言語・就学レディネスとの関係では、さまざまな所得グルー

ブあるいは民族的な背景による違いはなかった。

10. 規制可能な保育の特徴と子どもの発育

本研究のさらなる目的は、保育園の「管理可能」な面と子どもの発達との関係を調べることであった。教育者、小児科医、公衆衛生の専門家からなる専門機関の助言に従い、子ども対スタッフ比率、グループの大きさ、教師の訓練、教師の教育の4項目を分析に利用した。

研究チームは子ども対スタッフ比率、グループの大きさ、教師の訓練、教師の教育について、助言された4つのガイドラインすべてを満たしている保育園はほとんどないことがわかった。ガイドラインの遵守度が高い保育園に預けられている子どもは、36カ月の時点で、言語能力と就学レディネスがより高かった。また、24カ月と36カ月の時点では、問題行動も少なかった。ガイドラインを一つも満たしていない保育施設に預けられた子どもは、こうしたテストの成績が平均より低かった。

まとめ

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」は1364人の子どもを対象とし、そのほとんどを7歳まで追跡調査し、異なる保育の形態が子どもの発達にいかに関係するか調べた。これまでの科学論文は、生後3年間を中心に書かれてきた。子どもの育児・保育環境は、そのコミュニティで提供される保育の種類、費用の手頃さなどを考慮し、家族が選んだものであり、無作為にさまざまな種類、質、量の保育に

振り分けたわけではない。研究に参加した家族は、多くの人口統計学的な特徴において、米国全体を代表するものであった。

NICHDの研究では、全米の家族にとって、家族の状況と家庭環境の質が、保育の選択と強い関係を持つ。そこで研究チームは、すでに十分に認識されている家族の特徴・状況と子どもの発達との関係という重要な点に加えて、子供の発育に保育がどのように独自に貢献しているか見出すことに焦点を当てた。

本研究の分析結果は、育児・保育に関する多くの質問になんらかの答えを与えるものとなるだろう。いま、多くの米国家庭がもつ育児・保育像を捉えることができるようになった。どのくらいの頻度で、どのくらい早期に保育が始まるか、また、今日の家庭の多くがどういった種類の保育環境を選ぶかなどを垣間見ることができる。研究ではまた、長時間保育を受けた子どもと母親がほとんど全面的に世話をしている子どもとを比較し、家族の特徴と子どもの発育との関係も検証した。そして、家族の特徴が乳幼児が受ける保育経験と関係があるかどうかを評価した。最後には、保育の特徴と、子どもの知的発達、言語発達、就学レディネスとの関係、および保育の特徴と母子関係との関連性を検証した。

研究チームは、家族や子ども一人ひとりの性格に加え、保育が子どもの発育に与える新たなあるいはマイナスの価値を探した。一般的に、保育の要素よりも、家族の特徴と母子関係の質の方が、子どもの発達に強い関連性をもっていた。これは、子どもが長時間保育を受けている場合でも、おもに母親が世話をしている場合でも当てはまる。

研究では、保育のある特徴や経験が、ほん

のわずかではあるが、子どもの発達に影響を与えることがわかった。研究の結果認められた保育の影響は概してわずかだが、取るに足らないとはいえないものである。

質の高い保育は、次の点に結びつくことが発見された。

- ・ 母子関係がよりよくなる。
- ・ 細やかさに欠ける母親の場合でも、乳幼児が不安定な愛着を持つ可能性が低い。
- ・ 子どもの問題行動の報告が少ない。
- ・ 保育を受ける子どもの認知能力が高い。
- ・ 子どもの言語能力が高い。
- ・ 就学レディネスが高い。

逆もまた真なりである。質の低い保育は、以下に結びつく。

- ・ 母子関係の調和度が低い。
- ・ すでに赤ちゃんの心を読み取る細やかさに欠ける母親の場合に、母子の愛着がさらに不安定になる可能性が高い。
- ・ 問題行動が多く、認知・言語能力、就学レディネスがともに低い。

より長時間の保育、あるいはより長時間の保育歴は、以下に結びつく。

- ・ 母子間の相互作用が弱い。
- ・ 2歳時点で問題行動に関する報告が多い。
- ・ 細やかさに欠ける母親の場合に、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性が高い。

より短時間の保育は、以下に結びつく。

- ・ 母子間の相互作用がよりよくなる。
- ・ 赤ちゃんの心を読み取る細やかさに欠ける母親の場合でも、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性が低い。
- ・ 24カ月における問題行動が少ない。

保育園での保育は、他の環境での同様の質の保育に比べ、認知・言語能力、就学レディネスともにより高い。グループ保育は、3歳の時点で、問題行動の報告の少なさにつながっている。したがって、乳幼児保育の経験は、子どもにとって意味があるといえる。

新しい保育環境に入る回数で測られる保育の不安定さは、母親が細やかさに欠け、敏感でない場合に、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性の高さにつながるということがわかった。

本研究に参加した子どものほとんどは、現在、7歳で1年生である。研究チームでは、今後数年も、今回の調査では解明されなかった保育と子どもの発達との関係についての疑問を明らかにするためにデータの分析を続け、専門家会議や科学関係の学術誌を通じて、新たな研究成果を発表していくつもりである。

*「小児科診療」第63巻 - 第7号(診断と治療社)より抜粋。今回の研究に関する研究者・研究機関および参考文献一覧は、CRNのホームページを参照してください。



働く母親の声

「子育て生活基本調査」、「幼児の生活アンケート」、「総務庁国民生活基礎調査」、およびシンポジウム参加者アンケートから

高木 友子(郡山女子大学講師)

ベネッセ教育研究所が行った「子育て生活基本調査」、「幼児の生活アンケート」、そして本日この会場にいらっしゃる働くお母様などから寄せられたアンケートの回答をもとに、日本の働く母親の現状と、母親たちが今感じていることをご紹介します。皆さんの身近にいる働く母親の声に、しばし耳を傾けてみてください。

図1は、日本に働く母親がどのくらいいるのかを表したものです。□の部分には父親も母親も働いていることを、■の部分には母親だけが働いていることを示しています。「0歳～2歳」でこれらを合わせると約25%、「3歳以上」では40%以上の家庭で、母親が働いていることがわかります。つまり、4世帯に1世帯は母親も仕事を持っており、働く母親

は決して特別な存在ではないことがおわかりいただけるでしょう。

さて、そんな母親たちは、育児についてどのように感じているのでしょうか。図2は、「子育てはどれくらい楽しいですか」という問いを「フルタイム就労」「パートタイム就労」、そして「専業主婦」の母親に質問した結果を表したものです。■の部分「とても楽しい」と回答した母親の比率です。これを見ると、「フルタイム就労」の母親が育児を「とても楽しい」と感じている割合が高いことがわかります。また、「子どもと一緒に遊んでいる時」や「子どもが園や学校での様子を話してくれている時」に「子育てをとても楽しいと感じる」と回答した母親の比率を見ると、「フルタイム就労」の母親が答える割合が最も高くなってい

図1 母親の就労割合

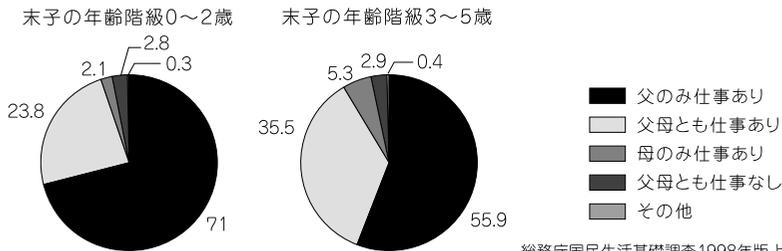


図2 子育ての楽しさ



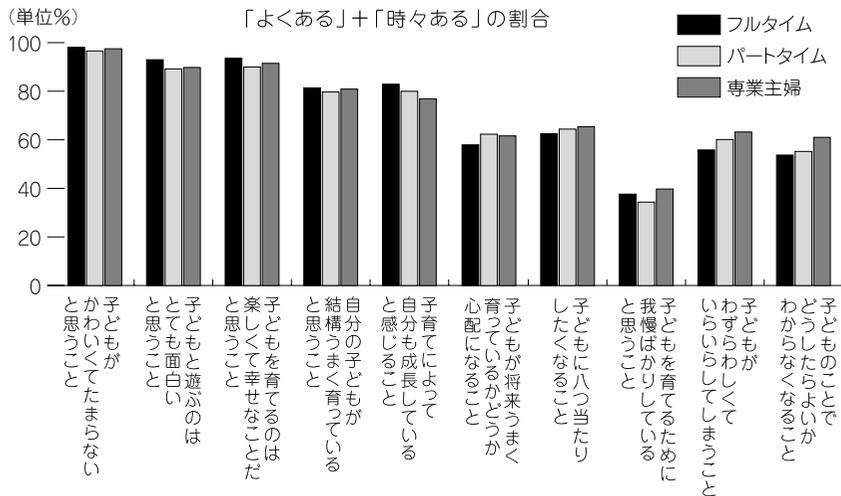
ました。

次に図3をご覧ください。左から5つ目までの項目は、子育てに対して肯定的な感情を抱いている母親の割合です。たとえば、「子育てによって自分も成長していると感じる」母親は、「専業主婦」よりも「フルタイム就労」のほうややや比率が高いことがわかります。一方、6つ目以後の項目は、子育てに対する不安を抱いている母親の割合です。このような不安を感じている母親は、逆に「専業主婦」の方がやや比率が高いことがわかります。

す。

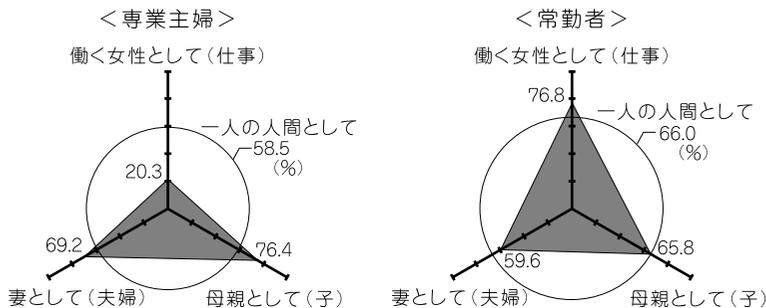
図4は「専業主婦」と「フルタイム就労」の母親の自己評価を表したものです。「フルタイム就労」の母親は、きれいな正三角形が描けていますね。正三角形が描けるということは、母親のアイデンティティが安定していることを意味します。フリードマン先生のご報告にもありましたように、母親が精神的に安定していると、子育てにもいい影響が出ると考えられます。

図3 育児への感情



ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成

図4 母親の自己評価



ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書」より作成